

## 死んでも生きる

(イザヤ書 30:18~19)

(I コリント 15:12~20)

私たちの救い主イエスは、十字架で死なれて三日目に復活なさいました。空になったイエス様の墓を見ても、また、復活なさいましたイエス様に会ったマリアの話の聞いても、弟子たちは信じようとしませんでした。なぜならば、私たち人間にとって死んだ人が甦るといことは考えにくいからです。

そのような弟子たちに、復活なさいました主イエスは顕れました。そして、弟子たちとともに食事をなさいながら復活の事実を露にし、頑なな心で主イエスの復活を信じようとしなかったトマスにも現れ、十字架で死なれたときに負わされた傷に手を当てて信じる者になりなさい、とおっしゃったのです。

天に昇られる前の 40 日間、今がその期間であります、主イエスはいろいろな形で、ご自身の復活を弟子たちに示してくださいました。復活なさいました主イエスに出会った弟子たちは変わり、イエス様を否認した以前とは違う姿で、恐れることなく堂々に命かけて福音を宣べ伝える者になったのです。十字架で死なれたイエス様が死から甦られた、という事実が彼らを復活の証人として立たせたのです。そして、彼らが伝えるその福音によって教会が建てられ、福音が世界の隅々まで届くようになったのです。

使徒パウロは生前のイエス様には会うことができませんでしたが、復活なさいました主に出会い、弟子たちのように復活の証人になりました。

使徒パウロは皆さんがよくご存じのように、三度に渡って伝道旅行をしますが、その 2 度目の旅行の時に生まれたのがコリント教会です。

第二の手紙の中で「2:4 わたしは、悩みと愁いに満ちた心で、涙ながらに手紙を書きました。あなたがたを悲しませるためではなく、わたしがあなたがたに対してあふれるほど抱いている愛を知ってもらうためでした。」と書かれているのを見ると、使徒パウロは離れていながらもコリント教会を愛し、関心をもって、その教会のいろいろな問題に対して、どうか信仰的な教えをしようとして手紙を書きました。港町であるコリントは、多種多様な人たちが住み、また往来していて、自由奔放な雰囲気でした。宗教も多くあってそれぞれの神殿があり、そこでは宗教的な買春行為が合法的に行われていたようです。そのような地域的な雰囲気もあり、殆どが異邦人で、聖書に対する知識が乏しかったコリント教会の人たちは、自己中心的な信仰生活で、互いに争うこともあったようです。

そのようなコリント教会のいろいろな問題、信仰生活や家庭の生活まで、詳しくパウロは手紙を通して教えています。その中でも復活信仰の問題は深刻でした。使徒パウロは信仰的にも未熟で、彼らの無分別な生活の根本的な問題が、復活信仰をしっかりとっていないことによるものだと見抜き、それを正そうとしていたのです。

コリントの信徒への手紙 I 15 章 12 節で使徒パウロは「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。」と、問うています。死んだ人の復活などあるはずがない、あるいは、神の子イエスは可能かも知らないけど、私たち人間にはない、との話が合ったのだと考えられます。

異邦人伝道に全力を尽くした使徒パウロの命をかけた伝道活動は私たちがよく知っていることです。主イエスに出会う前にパウロはキリスト者を迫害していましたが、ダマスコ途上で復活なさいましたイエス・キリストに出会い、その回心によって、キリスト者になり、眞の救い主こそあなたたちが十字架で殺した神の子イエス・キリストであるとユダヤ人に向かっても伝えるほど大胆になり

ました。使徒パウロの献身的な伝道活動は私たちがよく知っているところです。

彼は、生前イエス様に出会ってはいませんが、自ら使徒であることを確信していました。そのパウロは特に異邦人伝道に強い使命をもち、力を注ぎました。その福音伝道における情熱は、当時世界の中心だとも言われるローマにまで向かっていました。

怖いもの知らずのパウロの福音伝道に対する熱心の根本にあるものは、イエス・キリストの復活でした。復活を信じるとは、イエス・キリストの十字架での死が確実なことであることを先ず信じることです。イエス・キリストの十字架と復活は使徒パウロのすべてでした。

使徒パウロは言います。「死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずで、そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」さらに、復活がなければ、伝道をしている私たちは神の偽証人であり、信仰さえ、空しいものであるとも言っています。私たちが復活に対する望みがなく、この世の生活だけでの望みならば、最も惨めな人であるとも言っているのです。

「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」とはつきり宣言しています。つまり、初穂のキリストの復活に続いて、信じる人すべてに復活があるということを行っているのです。

今日の旧約聖書の中で、イザヤ預言者はこのようなことを言っています。

「30:18 それゆえ、主は恵みを与えようとして、あなたたちを待ち、それゆえ、主は憐れみを与えようとして、**立ち上がられる**。まことに、主は正義の神。なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は。」

イザヤ預言者が活動をしていた当時は、国が混乱状態でした。北イスラエルはアッシリアに滅亡され、南ユダはアッシリアとエジプトの強国の挟間で苦しんでいました。いつイスラエルのように国が滅んでしまうか分からない状態でした。そのような不安な情勢の中、民心は動揺し、社会は不正が蔓延し、宗教さえ堕落していました。先が見えない絶望の状態でした。

その中で、政治的な指導者は勿論、宗教的な指導者さえ、目に見えるものに頼ろうとしていました。アッシリアに付くか、エジプトに付くべきか、力あるもの、見えるものに助けを求めます。

そのようなユダに預言者イザヤは、偶像崇拜に染まっていたユダが本来立つべきところ、神様のもとに立ち帰るならば、救いがあることを告げます。つまり、アッシリアでもない、エジプトでもない、神様のみに希望があることを言っているのです。

「・・・お前たちは、立ち帰って、静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある・・・」（イザヤ書 30:15）」

私たちが信じる神様は生きておられる方です。神と等しい方がこの世に来られ、私たちのために死に、そして復活なさいました。選ばれた者のために立ち上がられる方です。この世の傍観者ではないのです。私たちの人生に関与し、そして働いてくださる、生きておられる方です。死んで終わったのではなく、よみかえられた方です。そして、私たちに憐れみ、私たちに助けるために「立ち上がられる」方です。この「立ち上がられる」という言葉には、神ご自身の力を示されるという意味があります。

この世の絶望の中でも生きる道は主の御手にあります。そして、それはこの世で終わることではなく、死んでも生きる、この世を越えての希望です。生きても、死んでも、私たちは復活によって示された主の御力によって生かされるのです。

今、不安と試練の中にいるわたしたちですが、独り子をとおして示してくださった神さまの愛と力に全てを委ねて、主の復活の事実を深く吟味し、信仰をより強める期間でありたいと思います。